



◎道路功績者の表彰

本會道路功績者表彰規程に依り左の通表彰し、關係地方廳に傳達方を依頼せり。

△昭和十六年四月四日

表彰狀、一等功績章、三ツ組杯、岐阜縣修路工夫	小山田 露雄
同 同 同	味田 安右衛門
同 二等功績章、單杯	松 井 金 治
同 同 同	大 橋 重 一
同 同 同	今 井 仙 一
同 同 同	森 新 市
同 同 同	成 瀬 末 吉

◎理事會開催

昭和十六年四月二日 正午麴町區丸ノ内日本俱樂部に於て開會水野會長、成田氏、佐上氏、谷口氏、辰馬氏、中川(正左氏)中川(吉

造氏)牧氏、藤井氏、金子氏の十理事和田氏外四幹事、出席午餐の後會長より理事會を開く旨を告げられ昭和十五年度事務報告を承認し昭和十六年度歳入歳出豫算、財務處理規程中改正の件、技術者を海外派遣方建議の件を可決し尙本會の振起方に付き懇談を遂げ午後二時過ぎ散會す。

◎技術者海外派遣に關する建議

四月一日開會の理事會に於て決定し關係方面へ提出したる建議書は左の如し。

建 議

本會へ創立以來二十有餘年間常ニ思フ全國道路ノ改良整備ニ致シ道路ノ構築舗裝等ノ如キ昔ク世ノ認識ヲ深カラシムルニ至リシハ本會與テ貢獻スル所尠カラザリシヲ信ジ候今ヤ世界ノ動亂ハ底止スルヲ知り難ク而カモ我國ハ東亞新秩序ノ建設、大東亞共榮圈ノ確立ニ向テ總力ヲ擧ゲテ邁進シツツアリ茲ニ高度國防國家ノ建設ヲ目標トシ諸般ノ施設ヲ完遂セザルベカラザルノ情勢ヲ見ルニ至リ候然ルニ防空ニ對スル設備ノ如キ殆ド視ルベキモノナク寔ニ憂慮ニ堪ヘザル所ニ有之殊ニ道路ノ構造ト防空施設トノ關係ニ付テハ更ニ痛感スル次第ニ候就テハ之ガ調査研究ハ焦眉ノ急務ニシテ一日ヲ忽諾ニ付スベキニアラズト存候仍テ此際道路技術ニ堪能ナル技術者ヲ獨逸伊太利等ノ諸國ニ派シ彼ノ地ニ於ケル近代道路ノ構造施設ヲ觀察見學セシメ其ノ結果ヲ參酌シテ適應ノ施設計畫

ヲ樹テ以テ防空上遺算ナキヲ期セラレシコトヲ切望スル次第ニ候
茲ニ理事會ノ議決ヲ經意見書提出仕候
昭和十六年四月四日

道路改良會

會長 水野 鍊 太郎

内閣總理大臣

大藏 大臣

内務 大臣

陸軍 大臣

海軍 大臣

企畫院總裁

苑 各 通

◎堀内土木事務官

故淺香土木事務官の後任として下關土木出張所土木事務官堀内
春宗氏が道路課に轉任せられた。氏は明治二十八年二月六日東京
市目黒區宮ヶ丘に生れ、大正三年三月福島縣立福島中學校を卒業
し同六年五月福島縣書記として耕地整理係に従ひ翌七年一月農商
務省森林主事に轉じ同九年九月、同省屬となつて山林局勤務同十
二年四月中央大學專門部法學科に入學、同十三年四月内務屬に轉
じ土木局港灣課勤務同十五年三月中央大學專門部法學科を卒業昭
和四年五月香川縣道路主事となり、同七年靜岡縣道路主事に轉任
同八年十月滿洲國々務院民政部事務官（規畫科長）となり同九年

七月民政部理事官同十二年一月土木局理事官（企畫科長兼監理科
長）同年七月交通部理事官（監理科長）を歴任、同十四年六月土
木事務官に就任、下關土木出張所勤務ヲ命ゼラレ同十六年四月
本省土木局道路課勤務に命せられた。

◎道路課長の交代

田中省吾氏が愛知縣警察部より土木局道路課長に轉せられたの
は、昨十五年四月十日であつて本會主任幹事として本會機構の改
正、紀元二千六百年並道路法二十周年記念事業として路政功績者
の表彰記念雜誌の刊行を策せられ又更らに本會活動の計畫を企て
られ其準備中なるの今日、河川課長に轉せられたるは寔に遺憾で
ある。幸に局内の轉任に止り後任（廣島縣經濟部長）川上和吉氏
に協力せられ本會振興の策を樹てらるゝことを期待する次第であ
る。

◎本會幹事委囑

本會に於ては道路課長川上和吉氏。土木事務官堀内春宗氏にそ
れ／＼本會幹事を委囑

◎理事扶問茂氏

本會理事前内務次官扶問茂氏は大政翼賛會組織部長に
れた。

◎評議員男爵澁澤敬三氏

本會評議員第一銀行取締役男爵澁澤敬三氏は全國貯蓄

々長に就任せられた。

◎地方土木主任官事務打合せ

来る五月二十二、二十三兩日内務省に於て開催の事に内定したる由

◎内務省土木試験所談話會

第二百十七回技術談話會話題

昭一六、年四、一一、午後二、〇〇——〇〇

一、歐米主要大都市の水道水源の現状に就て

(三〇分) 竹内俊雄

二、鐵筋コンクリート片持版の試験結果に就て

(三〇分) 一木技師

三、蘭印産天然アスファルト (Boston Asphalt Boeton-

Island, celees) に就て(豫報)(二〇分) 福島技師

四、セントローレンス河改修問題(四〇分) 鈴木出張所長

◎技術談話會前同講演要旨

内務省土木試験所

第二百十五回 (昭和十六年二月二十六日)

◎局部的に荷重を受ける場合のコンクリートの許容支壓應力度實

験式 一木技師

コンクリート支承面が局部的に荷重を受ける場合には、面全體に荷重を受ける場合よりも許容支壓應力度を大きくとることが

出来る。

之に關し $30 \times 30 \times 36$ 歳の供試體に A, A', A'', A''' を種々に變

へて試験を行ひ、帶荷重の場合 $\sigma_{ca} = \sigma_{ca} \sqrt{\frac{d}{d'}} \left(\text{但し } \sigma_{ca} \right.$

$\sqrt{280} \frac{\text{kg}}{\text{cm}^2}$), 點荷重の場合 $\sigma_{ca} = \sigma_{ca} \sqrt{\frac{d}{d'}} \sqrt{A} \left(\text{但し } \sigma_{ca} \right.$

$\sqrt{400} \frac{\text{kg}}{\text{cm}^2}$) なる實驗式を導き、土木學會鐵筋コンクリー

ト標準示方書に規定されてゐる許容支壓應力度の限度よりも遙かに大なる値まで許容し得ることを確かめた。

◎熱帯多雨地方の土壤 (速報三八號)

藤井技師

温帯多雨地方でローム赤土となり、同小雨地方で黄土となるが

熱帯多雨地方は氣象作用激甚なるが故に母岩と全く性質を異にする紅土となり、珪酸分少く珪酸と礬土との比が二以下、殆ど

一に近くなり極めて粘性で含水當量も七〇に達し、赤土と全く性質を異にし、その分布は赤道熱帯圏で多雨地方のアフリカ、

印度、佛印、蘭印に多し。

◎揚子江と武漢大學

藤井技師

揚子江 吳淞〇を起點とし漢口に至る一、〇〇五浬の間の中水

位一・九四米で殆ど一〇萬分の一の緩勾配であり、漢口の河

幅一五〇〇米洪水高一三米、洋々たる江であり、宜昌に至つて

始めて三九米、その河幅、流速、水深、護岸工法をのべた。そ

の距離、河幅、中水位、流速、流深次の如し。

地名	距離	河幅	中水流	速H/sec	最大洪水時	中水時	低水時	水深	米摘	要
吳淞	七〇								三五	
南京	五五	一八〇		一・六七					三七	
安慶	四〇	三〇〇		三・七二	三・三二	二・〇八	一・二九	〇・五二	二四	吳淞安慶間勾配二六萬分の一
九江	七五	二五〇		六・六二	二・七〇	二・三三	一・五〇	〇・七五	二五	吳淞漢口間〇
漢口	一〇五	二五〇		二・九四	二・八二	二・三三	一・五〇	〇・八二	二〇	萬分の一洪水位一二米
長沙	二二〇	二一〇		二・五八	三・〇九	二・五七	一・八〇	〇・五二		
宜昌	二五〇	二〇		三・六九	三・〇六	二・八三	一・八〇	一・〇三		
重慶	三〇〇	七〇		一・六六	一・五〇	一・三三	〇・九二	〇・五九	二・〇六	

武漢大學、武昌に近き國立武漢大學は、法文理農工醫の學部よりなり、教授は專任で兼職を許さず。學生は總て寄宿舎に入れ軍事教練を必須とし、國家權要の人材養成を目的とす。工學部最も學生數多く、教授には校宅を供し特に附屬小學校をも設けてゐる。完成二年目に事變に逢つた。

第二百十六回 (昭和十六年三月二十八日)

一、積雪に關する二三の實驗 特に電氣抵抗値に就て

島田 技師

積雪深度測定資料とし、表面より深さ三十糎に至るガラメ雪コシマリ雪層等に就き電氣抵抗値を測定し雪質による差異を明らかにし平均値とし 20×10^6 (Wcm) を得、積雪深度測定に電氣抵抗法を適用する除電壓、電流電極に關し考慮すべき諸點を説明す。雪上自動車の運轉安定性判別値とし積雪支持力の試験の

一方法として行ひし落下鋼球による針入度試験結果(重さ三・九五磅、直徑一〇、一糎をも説明し此種硬度測定のみ吟味を提言す。

二、雪上自動車走行試験結果に就て

藤森 技師

三月三日より約十日間赤倉附近に於て行つた結果ガラメ雪の上に於て得たデータは次の如くである。走行路の勾配は $1/20 \sim 1/25$ である。

(一) 速度 上り一〇糎時 下り二〇糎時

(二) ガソリン消費量 上り二立糎 下り〇七立糎

(三) 牽引力 一屯の轆を引いたがその牽引力は

上り 走行時三〇〇〇〜四〇〇〇 下り 一〇〇〇〜一五〇〇

出發時一〇〇〇糎以上 六〇〇〇〜七〇〇〇

猶襪添加の爲のガソリン消費の増加は三〇〜四〇%であつた

(四) 制動距離二〇糎時の速度で $1/20 \sim 1/25$ の勾配坂路を走行中アクセルペーダルをはなして約六〜八米にて停止する。

三、單動調壓水槽に關する研究(一)

横田 技師

單動調壓水槽の Up-sucking の場合の最高水位を求むる數表の作製に就き報告し、其の後の振動減衰の状態を明らかにした。次回は安定に關する問題を取扱ふ豫定。

四、風と波の高さに就て

佐藤 技師

風速と波高に對する在來の諸公式に就き論じ、之等諸公式の短所を除く目的を以て、利根川河口鈍子に於ける實測値一・一二箇と廣井博士觀測の資料九箇とに基いて次の如き實驗式を得た。

$$2h = 1.314V \frac{11}{18}$$

更に之の係數、指數を簡單化し

$$2h = \frac{8}{7} V \frac{11}{8}$$

を得た。

五、港灣構造物の設計示方書特に防波堤設計示方書に就て

松尾 技師

一般に示方書を作る事の可否を論じた後港灣構造物示方書作製の理念を述る。

我邦港灣構造物の設計標準は極めて區々であるからある程度統一を畫る事が必要であり、又最近著しい進歩を遂げた部分に對しては之を取入れて標準を定める事が必要である事を述べ尙、防波堤設計示方書案に就て一通り説明して批判を求めた。

◎近刊圖書雜誌 (交換寄贈)

◎北海道帝國大學工學部記要(第六冊二號)

◎石油時代(四月號)

◎道路(第三卷四號、防空と都市問題特輯號)

◎汎交通(四月號)

◎土木滿洲(第一卷二號)

◎企畫(第三卷一二號)

◎斯民(四月號)

◎鐵道軌道經營資料(四月號) (山崎定集氏) 自動車補助制度概

說)

◎都市問題(第三二卷四號)

◎觀光聯盟情報(第五卷三號)

◎港灣(第一九卷四號)

◎鑿國精神(四月號)

◎セメント界彙報(第三九七號)

◎地方行政(四月號日文版)

◎濟和(第八卷三號)

◎警察協會雜誌(四月號)

◎土木(第六二號)

◎土木學會誌(第二七卷三號)

◎三田學會雜誌(第二四卷一二號、第二五卷一、二、三號)

◎法律時報(四月號)

◎水利と土木(第一四卷四號)